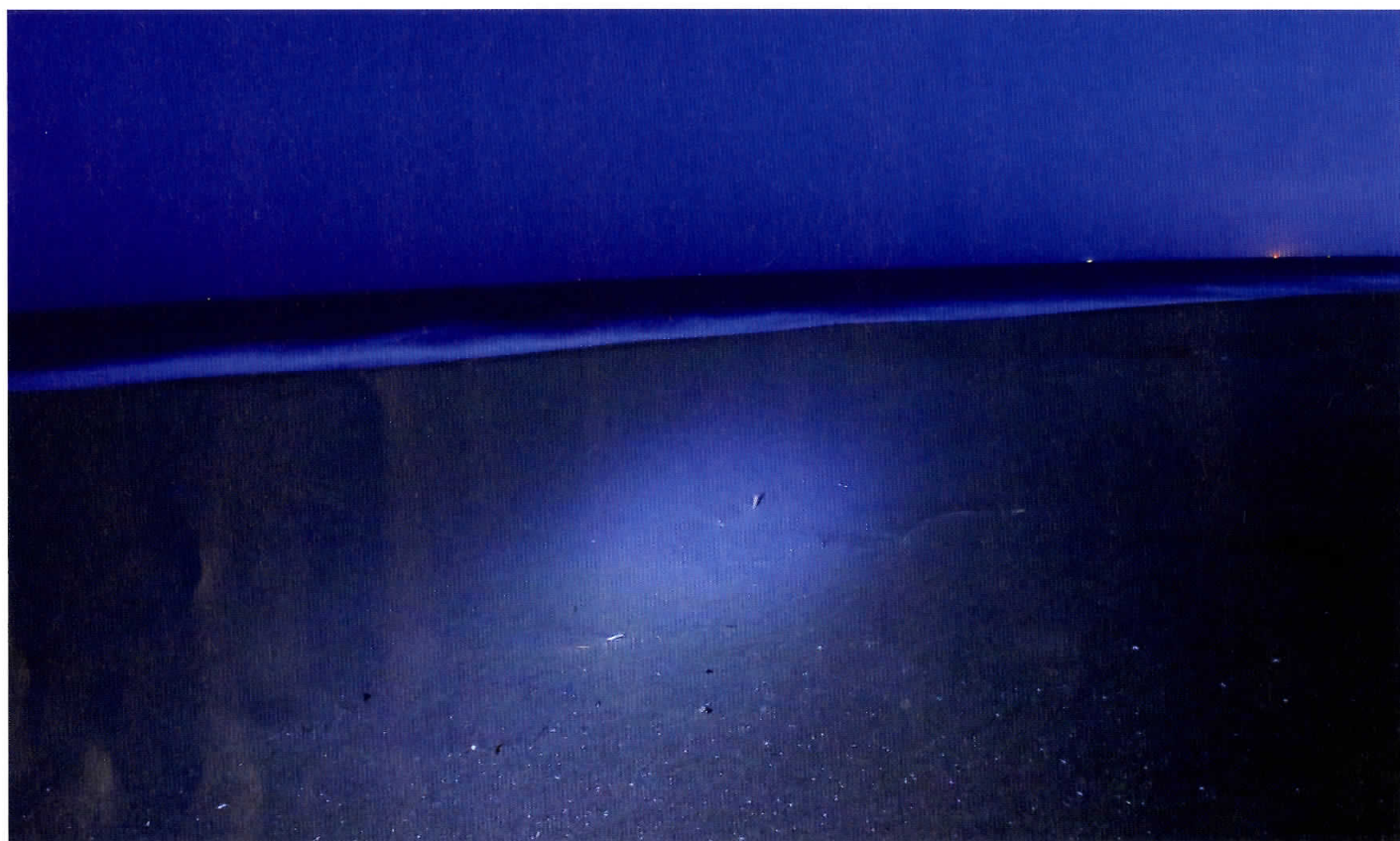


仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News



仙台市若林区



辺見庸「眼の海」
(2011年 毎日新聞社)

(辺見庸「眼の海」)

死者のことばをあてがえ

わたしの死者ひとりびとりの肺に
ことなる それだけの歌をあてがえ
死者の唇ひとつひとつに
他とことなる それだけしかないことばを吸わせよ
類化しない 統べない かれやかのじよだけのことばを
百年かけて
海とその影から掬え
砂いっばいの死者にどうかことばをあてがえ
水いっばいの死者はそれまでどうか眠りにおちるな
石いっばいの死者はそれまでどうか語れ
夜ふけの浜辺にあおむいて
わたしの死者よ
どうかひとりであてがえ
浜菊はまだ咲くな
畦唐菜はまだ悼むな
わたしの死者ひとりびとりの肺に
ことなる それだけのふさわしいことばが
あてがわれるまで

文学のある風景

小池 光の 気になる日本語

23

ルビ

日本語には漢字、カタカナ、ひらがなの三種の文字がある。三種の文字を適材適所、自在に使い分け読み書きする。こういう言語は日本語だけだ。偉大な発明である。

日本語の偉大な発明はそれだけではない。ルビもまた独特の発明である。難しい漢字熟語の右側に小さな活字のひらがなでその読み方を示す。語意は漢字で、読み方はルビで、というわけだ。こういう言語もまた日本語だけだろう。

「ルビ」という言葉の語源は、宝石のルビーである。なぜここに宝石名が出てくるかというと、明治初期に文明開化がおこり、西欧の文物がどっと入ってきた。このとき活版印刷の技術も入ってきた。当時のイギリスでは活字の大きさをダイヤモンド、エメラルド、ルビーというようにニックネームで呼ぶ習慣があった。ごく小さいサイズ、これがそのまま移入されたのである。

ルビは親切便利といえれば親切便利、うるさいといえばうるさい。読み方がわかっている人には無用だからだ。むかしはすべての漢字にルビを振った、総ルビの本などもあったがいまは少なくなった。教育水準があがって、高度の識字率

をもつ社会になったからだ。

現在の新聞を注意ぶかく読むと、ルビはほとんど使われていないが、人名、地名の読みにくい場合などには付いているときがある。中国や韓国の人名などは、その国で呼ばれる発音が、ひらがなでなく、カタカナで付く。「習近平」「李克強」にはそれぞれ「シージンピン」「リークオーチャン」とルビがある。現地の読み方はその名の通りだけれど、テレビのニュースのアナウンサーは日本語の音読みのまま「しゅうきんぺい」「りこつきょう」と発音しているから、どうもあまり意味のあるルビではなさそう。なくしてもいい。

ルビの効能をもっとも自在に活用したのは、井上ひさしの『吉里吉里人』という長編小説。この奇想天外な物語は、また秀れた日本語論でもある。一つ一つの熟語に吉里吉里語、つまりは東北弁、による発音が克明に付いていて面白く、それだけ読んでも飽きない。

「手術室」「静脈」「無知蒙昧」「一卵性双生児」などに、「すずつすづ」「ぞーみやぐ」「むつもーめー」「えづらんせーそーせーづ」などわれわれの発音通りのルビが付く。

「唇」の語に「くつべら」と付いているところがあって、爆笑したことがあった。なんと真っ赤な「靴籠」だ、この娘さんは！

学芸室日記

○2017年10月16日(月)

東北大学附属図書館と共催の特別展「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」(11/3～14、せんだいメディアテークにて開催)のPRのため、仙台市内の「青葉通地下道ギャラリー」にてプレ展示を行いました。

これまで文学館の外で展示をする機会がほとんどなく、しかも大勢の人たちが行きかう街なかということもあり、どれだけの人が関心を示してくれるのか正直不安だったスタッフ。しかし、



展示作業直後から何人もの人々が足を止めて見入ってくださっている様子に、漱石への関心の高さがうかがわれ、嬉しくなりました。その期待どおり、本番の特別展は大盛況のうちに終了しました。

○2017年11月3日(金・祝)

特別展「上橋菜穂子と〈精霊の守り人〉展」の関連イベントとして、上橋菜穂子さんをお招きしてギャラリートークを開催しました。

このイベントは展示開幕後に開催が決定し、急きょ告知したにもかかわらず数日で参加申し込みが定員に達したという、上橋さんの人気を象徴するものとなりました。会場に集まったファンの皆さんは、展示資料についての解説や創作の裏話など、上



橋さんのお話に熱心に耳を傾けていました。

上橋さんはこの日、館内のレストランで提供していた特別展メニュー「ノギ屋の弁当風鶏飯」をご賞味くださいました。喜んでいただけたようで良かったです！

○2017年12月16日(土)

この日から始まった企画展「井上ひさしの国語教室 井上ひさし資料特集展vol.7」(4/8まで開催)。自筆資料や蔵書が並ぶ展示室の奥に、ベッドにアイ

ロン、トレンチコート、ゴキブリホイホイ(!)などが置かれた不思議な空間が。実はこれ、井上のエッセイに記された「本の十徳」を実証するためのコーナー。たとえば、本は「枕にちょうどよい」という「徳」を実感していただくために、実際に本を枕にしてベッドに横になってもらおう、という仕掛けです。本展にご来場の皆さま、「ふかいことをゆかいに ゆかいなことをまじめに」の井上ひさしの世界を体感していただけたでしょうか？



『秘本三国志』



陳舜臣『秘本三国志』(一)
(中公文庫版)
(2009年 中央公論社)

私は夏目漱石好きの漫画家である。私からして、「私の一冊」を紹介して欲しいと依頼を受けた時「やはり漱石作品か漱石関連書を期待されているのだろうか」と一応考えた。一応。



そもそも私が好きなのは作家夏目漱石ではなく、漱石を内包した人間夏目金之助である。夏目漱石という人物が気

になり、手始めに随筆や書簡に触れ、じゃあ小説も読んでみるか…という、小説作品を読むスタンスとしては多少のやましさを伴うものであった。そんな私であるから漱石作品を選ぶのはちょっと気が引けるのだ。

では、歴史物に対する認識やスタンスが形成されたきっかけはなんだろうか。悩む間もなく出てきた本が陳舜臣『秘本三国志』である。

初めて『秘本三国志』を読んだのは高校二年であった。新しいクラスで出来た友人がいわゆる活字中毒の人だった。私は活字中毒ではないが、学年に数人はいる毎日図書館に行っているタイプの生徒の一人だった。なのである程度顔見知りではあったのだろう。

『秘本三国志』を貸してよした。話せる「お仲間」を増やしたかったのだと思う。布教活動だ。それにまんまとはまったのだ。だつて面白かったから。

ざっくり言うと諸葛亮を擁する善なる蜀の劉備と悪辣なる魏の曹操の対決といったところだろうか。敵と味方がはっきりしているお話は楽しくハラハラできる。呉はどうしたのとか突っ込んではいけない。

その結果どうなったか。「秘本三国志」を聖典とし、「正史三国志」を眺めてニヤニヤし、自分の解釈ならこうだなど妄想し、三国志本やTVの三国志特集にいちやもんをつける若者の出

る。あととされるように『三国志』と名のつくものを片っ端から手に取る若者の出上がりであり

一方『秘本三国志』は正史ベースの小説である。中国仏教や五斗米道の宗教関係者の目線を一つの軸とし、各陣営善玉も悪玉もない。後に英雄と呼ばれる人物たちの行動・決断の裏にある為政者としての思惑などが書かれ、人として実在した彼らは

余地はあると思う。あるとき三国志を扱ったTV番組が放送され、そのゲストが陳舜臣であった。演義の話

を元にまとめられた通俗小説『三国演義』が存在する。そして、『三国志』には陳寿が書いた正史の歴史書に裴松之が注を加えた『三国志』と、説話や講談

を元にしたのだらうと思える。これ、エピソードや名前だけでなく記憶の片隅に残れば思いながら描いてきた。何かの折に「あつんだか聞いたことがあるぞ」と本に手を伸ばすきっかけとなるならば幸いである。

ハマりたての上に高校生で具最真、推しは諸葛亮を偉大にするためIQが下げられ狭量になり見せ場を奪われるのが常であった。痛々しいが情状酌量の余地はあると思う。

史上の出来事であるかのように扱う番組をぶうぶういいながら友人と見ていた。こんな番組では陳先生も大変だなあと思いがら。

突然、自分は享受するだけの気楽な存在であるということに気がついてしまった。気楽に文句をつけるその先には、別の目線で見える大事があることを知ったのだ。

さて、『三国志』と二言でいうが、あなたの知っている『三国志』はどちらだろうか？

『三国志』には陳寿が書いた正史の歴史書に裴松之が注を加えた『三国志』と、説話や講談を元にまとめられた通俗小説『三国演義』が存在する。そして、『三国志』には陳寿が書いた正史の歴史書に裴松之が注を加えた『三国志』と、説話や講談

しかしふと気がついた。私達よりも当然演義にも正史にも詳しい陳舜臣は始終にこにこしているのだ。三国志の話が出来るのが嬉しいという雰囲気であった。

自分はファンとして、その作品が読み継がれることを大事とするその域にたどり着けるだろうか。

『三国志』には陳寿が書いた正史の歴史書に裴松之が注を加えた『三国志』と、説話や講談を元にまとめられた通俗小説『三国演義』が存在する。そして、『三国志』には陳寿が書いた正史の歴史書に裴松之が注を加えた『三国志』と、説話や講談

これを、エピソードや名前だけでなく記憶の片隅に残れば思いながら描いてきた。何かの折に「あつんだか聞いたことがあるぞ」と本に手を伸ばすきっかけとなるならば幸いである。

人気のある時代や名作といえど読み継がれるには興味を引かねばならない。話題になること、新しい読者が三国志に触れることが喜ばしい。そういう高みに

陳舜臣が実際どう思っていたのかは知る由もない。しかし私は勝手に受け取った教えをずっと胸に刻んでいる。

最近「裾野が広くなければ山は高くならない」とよく口にす

これまで漱石にまつわるあれ

香日ゆら(こうひ ゆら)
漫画家。青森県生まれ。幕末・明治期の人物の評伝を読み、正岡子規と夏目漱石の関わりを知ったことから漱石に関心を持つようになる。趣味で描いていた漱石とその門下生についての漫画が出版社の目に留まり、連載を始める。著書に『先生と僕～夏目漱石を囲む人々～』全4巻、『漱石とはずがたり』全2巻(以上KADOKAWA)、『夏目漱石解体全書』(河出書房新社)、『ステラ』(講談社)、『大正四葉セレナーデ』全2巻(竹書房)。その他に、イラストを手がけた『夏目漱石、読んじゃえば?』(奥泉光著、河出書房新社)などがある。最新刊に『おじさんとポニーテール』全1巻(竹書房)。



夏目漱石とその周辺の人々の魅力にはまる! 香日ゆらワールド



2017年11月、せんだいメディアテークを会場に特別展示「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」が開催されました(主催:東北大学附属図書館、共催:仙台文学館)。

夏目漱石生誕150年を記念したこの展示では、東北大学附属図書館が所蔵する漱石の旧蔵書「漱石文庫」を中心に貴重な資料が公開され、12日間で約3000人が来場しました。

この展示のチラシ・ポスターのイラストを手がけたのが、今回「私の一冊」をご寄稿いただいた香日ゆらさん。実際の展示でも、漱石と周辺の人々の相関図や、漱石の等身大パネルなどに香日さんのイラストが使われ、来場者に大好評でした。

香日さんは自他ともに認める漱石の大ファン。その「漱石愛」は、漱石自身はもとよりその友人や門下生たちにも及び、漱石と周辺の人々にまつわるエピソードを満載した著作を何冊も刊行しています。



特別展示「夏目漱石～その魅力と周辺の人々」の様子

漱石の門下生といえば、仙台には東北帝国大学の教授を務めた小宮豊隆(ドイツ文学者)と阿部次郎(美学者)がいました。名前は聞いたことがあるけれど、どういう人か詳しくはわからない……という方に、香日さんの著作をおすすめします。漱石をリスペクトしてやまなかった小宮や阿部といった門下生たち、そして彼らの愛を一身に集めた漱石の人間的魅力に、はまること間違いなしです!

そこから漱石の文学や周辺の人々が書き残した作品へと、読書の幅が広がっていくのも楽しいのではないのでしょうか?



『夏目漱石解体全書』
(2017年 河出書房新社)



『先生と僕～夏目漱石を囲む人々～』全4巻
(2010～2012年 KADOKAWA)



『漱石とはずがたり』全2巻
(2014年 KADOKAWA)

物語と出会える場

「杜の都の演劇祭」にみる、文学を楽しむ方法



「杜の都の演劇祭」略して「杜劇祭」は、敷居が高いと思われるがちな演劇を気軽に楽しんでいたことが二〇〇八年に始まった演劇祭です。おもに仙台の街なかのカフェやレストランを会場に、お料理やスイーツとともに観劇するスタイルにこだわっています。

また、「リーディング」（俳優が台本を持ちながら演じる公演形式）での上演も杜劇祭の特徴。これまで国内外の戯曲・小説・エッセイなどさまざまな作品を取り上げてきました。その数は七十にも及び、菊池寛「父帰る」、太宰治「トカトン」、宮沢賢治「銀河鉄道の夜」、井伏鱒二「山椒魚」などの名作から、最近のベストセラー、外国文学にいたるまで、多彩な演目を上演しています。

二〇一七年で十回目を迎えた杜劇祭に、「文学館目線」で注目してみました。



物語に気づき、確認しあえる時間がある

二〇〇八年に杜劇祭が始まって以来、スタッフとして関わっている遠藤瑞知さんは、杜劇祭の魅力を次のように語ります。



「あらためて本を読みたくなる」

遠藤瑞知さん
(仙台セントラルホール支配人)

杜劇祭では、俳優が言葉話すことによって自分の中に物語がどんどん入ってくるんです。視覚と聴覚、それから肌感覚。俳優たちの服の衣擦れ音なんかも含めて臨場感をもって物語がドドンとやって来る、それを受け止めるのが杜劇祭のおもしろさだと思います。

観ていいなと思った作品は、本を買ってきて読む。前に読んでいても、こんなにおもしろかったんだっけ？ と確認したくなるんです。そして読み返してみると、黙読にはない「言葉の表情」や「言葉の力」が込められていることに気づくんだと思います。だから、実際にお客様のアンケートでも、「本を読みたくまりました」「もう一度読みなおしてみたい」といった声が寄せられるんですね。

杜劇祭では上演前後に食事が提供されるので、お一人で来ている知らないお客様同士が同じテーブルで向かい合って食べるときに、中には無言の方もいますが、だいたい喋りたくなる。「おもしろかったですね」「お芝居はよくご覧になるんですか」とか。良いものが体に入ってくる。いい作品に出会うと、人ってそれをアウトプットしないと気が済まなくなるんですね。他の人と喋りながら、「あ、そういう見方もあったんだ」と確認しあえる時間がある。それもまた杜劇祭の醍醐味ではないでしょうか。

井上ひさし作品の魅力

プログラムのなかでも定番となっているのが、仙台文学館初代館長でもあった井上ひさしの作品です。二〇〇九年には井上自身も演目の選定に関わった「井上ひさしセレクション」を上演、そして井上没後の二〇一〇年には「井上ひさしメモリアル」と題して井上作品の特集も組みました。

仙台を拠点に活動する「劇団I・Q150」を主宰する丹野久美子さんは、これまでに杜劇祭のプログラムディレクター（演目の製作指導を行う役割）として井上の小説を四作品手がけています。丹野さんに井上作品の魅力について聞きました。



「井上さんの作品に出てくる人間は、みんな愛おしくなる」
丹野久美子さん
(劇作家・演出家・劇団I・Q150主宰)

井上さんの生の人間を書く力がすごい。しょうもない人、世間からちょっと離れたような人たちをチャーミングに書くんですね。しょうもないけど必死で生きているんです、みたいな人たち。どの人物も愛おしくなります。人の痛さ、切なさがさりげなくぼんと置かれていたり、日常のとってもささやかなところを切り取って書いている。だから井上作品を読むとじーんとしちやって胸が熱くなるの。

杜劇祭ではリーディング形式で演じるので、井上さんの小説の地の文章をセリフのように抜き出して役者に喋らせる。そうすると大変おもしろい。心地がいいんです。セリフにしても、井上さんは役者の息がわかっている人だと思う。人間って大事なことを喋るときに、絶対その前に息を吸っている。ふつうの芝居でも、息を吸うタイミングって大事だと私は思っていて、私自身、台本を書くときと句読点が多くなります。杜劇祭では、井上さんの作品の句読点はその通りに喋っています。目で見るとずいぶん点がないと思う文章もあるのですが、そこは一気に喋れ、つてことだと思つて喋る。そうするとすごくいいんですよ。井上さんの作品は、自分で声を出して読んでみると別の楽しみ方ができると思っています。



文学作品を「観て」「聴いて」楽しむ。しかも劇場での上演とは違い、お食事やお茶を味わいながら、場を共有する人たちと言葉を交わしあつて作品の余韻に浸る。そんな杜劇祭は「物語と出会える場」として、ふつうの読書とは異なる角度から文学作品に親しむスタイルを提案してきたと言えるのではないのでしょうか。

こんなふうに、ユニークなカタチで文学作品に触れることができる場が街のなかに増えていくと素敵ですね。文学館ではこれからこのような情報があれば発信していきたいと思っています。皆さまからも、「こんな楽しみ方はどう?」「こんな場所を発見!」などの声をお待ちしています!





文学館の受付にて講座の記録集を販売しています(2007~2016年度、既刊10冊)。短歌を作らない方にも読み物として楽しんでいただけます。ぜひ手に取ってみてください!

当館の人気講座、歌人・小池光館長による短歌講座が始まったのは、二〇〇七年六月のこと。以来、お題をもとに受講生から短歌を一首寄せていただき、それぞれに小池館長がコメントするというスタイルで、月に一回のペースで継続してきました。その短歌講座が、二〇一八年三月三日、記念すべき百回目を迎えました。

講座一回につき受講生の皆さまから寄せられる作品は八十〜九十首。百回までの総数は八五〇〇首を超えます。「万葉集」に収められている歌が四五一六首ですから、この数は特筆すべきものではないでしょうか。

お知らせ
小池光短歌講座
100回を
迎えました

講座の人気の秘密は、小池館長の細やかで味わいのある講評にあります。百回にわたって膨大な数の作品に目を通してきた小池館長は、「講座で二時間しゃべるのは、以前は平気だったんだけど今は疲れるんだよ」と苦笑いしながら、「よくやった。こんなに続くとは思わなかった」と感慨深げな様子。

講座は、二〇一八年度も例年同様に開催予定です。申し込みが定員を超えた場合は抽選となりますが、これから短歌を始めてみたいという方も大歓迎! 皆さまの参加をお待ちしております。

新資料紹介
向田邦子
ゆかりの品々

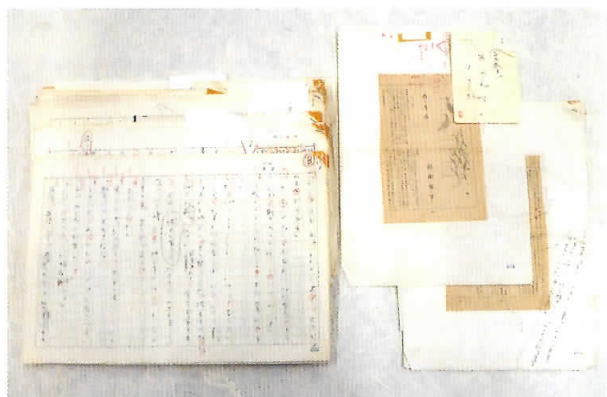
このたび、向田邦子ゆかりの資料が、妹の向田和子さんから、仙台文学館に寄贈されました。

資料の内容は、小説『あ・うん』の原稿や、愛用の万年筆などの筆記具、眼鏡、外国旅行の際のお土産など十四点です。

当館では、二〇〇四年に特別展「向田邦子の世界展」を、そして二〇一七年三月にライブ文学館スペシャル「家族の風景 向田邦子のまなざし」を開催しまし



海外旅行のお土産・外国の小銭
邦子は、執筆の合間を縫って、幾度も取材などで海外を旅していた。革製のハンドバッグ(左)は、ヨーロッパを旅行した際の和子さんへのお土産。



『あ・うん』原稿・校正刷り

『あ・うん』は、日中戦争後の東京・山の手を舞台に、20年来の友人である門倉と水田、そしてその妻たちの微妙な人間模様を描いた小説。幾度もドラマ化・映画化されている。原稿は全部で198枚。このほかに校正刷りなどもあり、雑誌連載時の内容から単行本に収録される際の編集の過程もわかる資料である。



写真提供:かごしま近代文学館

向田邦子

1929年東京生まれ。映画雑誌記者を経て、放送作家となり「時間ですよ」「寺内貫太郎一家」「だいの花」「阿修羅のごとく」などのドラマの脚本を手掛ける。1980年、第83回直木賞を受賞。著作に『父の詫び状』『思い出トランプ』『あ・うん』などがある。1981年、航空機事故により急逝。

向田邦子と仙台

父親の仕事柄、転勤が多かった向田家は各地を転居し、1947~1950年は仙台の琵琶首丁(現・青葉区花壇)に住まいを構えていました。東京の実践女子専門学校(現・実践女子大学)に在籍していた邦子は、弟と共に親戚の家に寄宿し、夏冬の休みごとに汽車で8時間かけて帰省しました。仙台に滞在している間は、東京での生活は切り離し、家族のために心を配り、向田家の長女に徹していました。

仙台での思い出は、「父の詫び状」のほか、「お化け」「一番病」(『霊長類ヒト科動物図鑑』)「クラシック」(『女の人差し指』)などに描かれています。

た。特に、ライブ文学館スペシャルでは、和子さんにご出演いただき、アナウンサーの山根基世さん聞き手に、仙台時代の思い出などをたっぷりお話しいただきました。終了後のアンケートも好評で、没後三十五年以上経っても、なお向田邦子とその作品が多くの方々に愛されていることを実感しました。

これらの資料は、今後、仙台文学館で展示していく予定です。

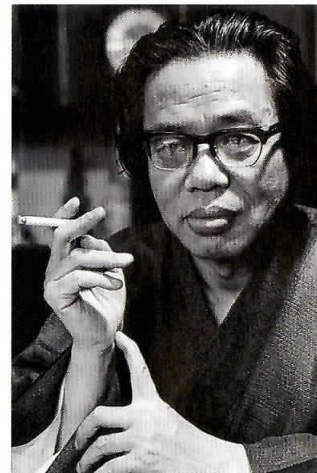


愛用の万年筆・鉛筆・眼鏡

万年筆は何本も持っていたが、原稿はほとんど鉛筆で執筆していたという。



川端康成



松本清張



幸田文



瀬戸内寂聴



手塚治虫

春の特別展 ● 田沼武能写真展
「時代を刻んだ貌」

会期:二〇一八年四月二十一日(土)~六月二十四日(日)

二〇一八年度春の特別展は、写真家・田沼武能による写真展「時代を刻んだ貌」を開催します。明治・大正・昭和の激動の時代に生き、生涯を賭して日本文化を創りあげた人びとの肖像写真約一三〇点を紹介します。

田沼武能 たぬまたけよし

1929年、東京・浅草に生まれる。東京写真工業専門学校を卒業後、サンニュースフォトスに入社、木村伊兵衛の助手となる。1951年、新潮社の嘱託として『芸術新潮』『新潮』の写真を担当。また、アメリカのタイムライフ社の契約写真家として雑誌『ライフ』の取材を行う。1972年、フリーランスとなる。ライフワークとして世界の子どもたち、変貌する東京、芸術家の肖像などを撮り続けている。日本写真家協会会長、日本写真著作権協会会長その他を歴任。モービル児童文化賞、菊池寛賞、紫綬褒章、勲三等瑞宝章を受章。文化功労者。

おもな写真集・著書に『文士』『東京の戦後』『難民キャンプの子どもたち』『武蔵野讃歌』『人間万歳一写真をめぐるエッセー』『時代を刻んだ貌』など。

会 期:2018年4月21日(土)~6月24日(日) 休館日:月曜日(4月30日は開館)、4月26日(木)、5月1日(火)、5月24日(木)
開館時間:9:00~17:00(入館は16:30まで) 観覧料:一般800円、高校生460円、小・中学生230円(各種割引あり)
※会期中、展示関連イベントを開催する予定です。詳しくはチラシ、ホームページ等をご覧ください。